

「別」の抒情

— 後拾遺集「別」歌をめぐって —

実川恵子

生涯の中で、人と人を結んだ絆や血縁関係によって営まれた愛情は、ある時空によって引き裂かれることがある。「別」の歌は、こうした人間同士の別れの悲哀の感情や惜別の思いをすくい上げ「別」という一つの形に織り成していく。

後拾遺集は、巻八に三十九首の別れの歌を配列させた。撰者通俊はこの別れの歌群を明確な編纂意図によって一個の有機的構造体としての意味や機能を持たせたようである。(注)では、このように構成された「別」の歌は、どのような抒情世界を現出しているのか。また歌人たちは「別れ」という人間の具体的な悲哀をどう受けとめ、どう表現したのだろうか。そんな単純な疑問から後拾遺集の別れの歌について考えてみたいと思う。

祭主輔親田舎へまかりくだらんとしけるに、
野の花山の紅葉などは誰とか見んとすると

いひてつかはしける

紅葉みんのこりの秋もすくなきに君ながるせば誰とをらまし

かへし

恵慶法師

をしむべき宮この紅葉また散らぬ秋のうちにはかへらざらめや

祭主輔親

巻頭を飾る別れの贈答歌である。恵慶と輔親はかなりの年齢差をこえた親交が認められ、恵慶歌の五句「君ながるせば誰とをらまし」には、ストレートな感慨が込められ印象に残る。また、同歌詞書中の田舎は、場所を限定しないもので、次歌462の「宮こ」と対比的な雰囲気を持ち、わびしさがひとときわ募る。この思いがけない先輩、恵慶からの惜別の辞を受けとめる輔親の心おどるような想いが詠歌から響いてくる。

当歌は古今集「離別」巻頭歌、在原行平の「立ちわかれないなばの

山の峰におふる松とききかば今帰りこむ」とは趣を異にする。後拾遺集では、別れによって残るもの、送られるものの両者の心情が表明されるこの巻頭歌に、別れの歌本来の持つ心の伝達の意味が込められる。

続く三首目の別れの歌は、源道濟463歌の、

田舎へ下りける人のもとにまかりたるけるに、侍らざりければ家の柱に書き付ける

つねならばあはで帰るもなげかじをみやこいづとか人のつげつる

当歌は、『道濟集』に「ある人の田舎へ下ると聞きて行きたるに、出でける程にて会はで帰りしかば」と詞書されて載る。本集にある「家の柱に書き付ける」という叙述はない。

この歌は、具体的な別れの感情は表現されずにその状況だけが示されることでより別れの落胆が語られているように思う。では、「家の柱に書き付ける」という叙述は何を意味するのか。「いつもならば会わないで帰っても嘆くことはないのだが、今回は都からの旅立ちと聞いて胸が騒いでかけつけたが、残念ながら会うことができなかった。」というその思いが、「家の柱に書きつける」行為となつたのであろうか。主のいない家の柱に書きつけた歌こそ悲哀を感じさせるものはない。『道濟集』の当該歌詞書にもないこの詞書表記が示すものとは何か。この「柱に書きつける」という語句の例はこの他次の三例が認められる。

あひ知りたる人のもとに行きたるに、家は昔のままにて主の

なくなりにければ、柱に書き付く

昔見し宿は変らずありながらあるじはなくもなりにけるかな

〔道濟集〕 53

修行に出で立ちける日、よみて右近のむまばの柱に書きつけ
侍りける

ともすればよもの山べにあくがれし心に身をもまかせつるかな

〔後拾遺集・雜三・増基法師 1020〕

岩清水にまゐりて侍ける女の、杉の木のもとに

住吉の松をいはひて侍ければ、かみの社の柱に

書きつけ侍りける

さもこそは宿のかはらめ住吉の松さへすぎになりにけるかな

〔後拾遺集・神祇・よみ人しらず 1176〕

『道濟集』の例は463歌に通じ、主なき家の寂寥感が表出される。かつて心を通わせた主は既になく、記憶の中の家は昔と変らずにある。その惜別の情は和歌を「柱に書きつける」行為に走らせたのであろうか。また、後拾遺集、増基法師詠1020は修行の決意を「柱に書き付」け、神祇歌¹¹⁷⁶は神の坐所が変わつたことで松が杉に変わつてしまったことを嘆き、歌を神の社の「柱に書きつけ」たのである。いずれも歌を書き記すという詞書表記のあることで、歌われている抒情が更に強調されるという効果もあるような気がする。

そのように考えると、この別れの歌のこうした「家の柱に書きつける」という詞書は、後拾遺撰者の意識的なフィクションによる詞

書表記への介入という性格も考えられるのではなからうか。

「別」巻には女性作者詠は少なく、五首を数えるにすぎない。そうした中で目を引くのが相模と赤染衛門詠である。次のような別れの歌を詠出している。

源頼清朝臣、陸奥国果てて、また肥後守にな

りて下り侍りけるを、出立ちの所に誰とも

なくてさしおかせける

たびたびの千代をはるかに君や見ん末の松より生の松原

(相模・474)

嘉言、対馬になりて下り侍けるに、人に代りてつかはしける
厭はしきわが命さへ行く人の帰らんまでと惜しくなりぬる

(同・475)

一首目は、「陸奥守となつて末の松山を見、また肥後守となつて筑紫の生の松原をこらんになる。松寿千年というからには、千年の行く末をあなたははるかにこらんになるのでしょうか。」と松によつて旅立を予祝した別れの歌である。続く478歌は代作歌だが、別れに際して送る人への純粹な至情が平明な中にもあふれている。

赤染衛門詠(491)は、男女の別れを描き出す歌群に認められる。

橘道貞式部を忘れて陸奥国に下り侍りければ、

式部がもつつかはしける

ゆく人もとまるもいかに思ふらんわかれてのちのまたの別れを

この歌は道貞と離別した和泉式部を気づかう著名な歌で、道貞と式部の別れの心を推し測る慈愛に満ちた歌となっている。赤染のこうした婉曲ながらも穏やかな詠法は別れの抒情として胸に訴えるものがある。撰者通俊も赤染歌を評価しており、和泉式部、相模に次いで多数入集させる結果となったのであろう。また、詞書は夫婦間に生じた男女の別れを明示する。撰者道俊の女歌評価の撰歌として意味を見い出せる歌といえるだろう。

次に注目したいのが、「別」巻における僧侶歌である。七首の僧侶歌は、惠慶法師や増基法師、慶範法師四首、連敏法師二首は後拾遺集に多数の歌を入集するが、他の堪円法師、良勢法師、寂昭法師はこの「別」巻にのみ載せる僧侶歌人である。

そして、更に僧侶を中心とする別れの歌が五首ずつ二歌群(479、483、495、499)にわたつて配されていることも見逃してはならない。後拾遺集における僧侶歌人の増大の傾向は既に指摘されるが、特にその入集が、多いのがこの「別」や「羈旅」巻である。このような状況をもとにまず僧侶歌の別れの歌にみる叙情性、そして歌群としての僧侶歌について考えてみたい。

前述したように「別」巻頭歌に惠慶法師と輔親の贈答歌を置き、別歌本来の持つその抒情は送る者と送られる者の心情を写し出すことを意味させた。そうした別れの歌の本質をこの僧侶詠の巻頭歌は荷っているように思う。

東へまかるとて、京を出づる日よみ侍りける

都いづる今朝許だにはつかにもあひみて人を別れましかば

この巻頭の贈答歌に続く増基法師詠(464)は、『増基法師集』中の「遠江日記」冒頭に位置する歌で、詞書は「これはとうたあふみの日記三月十日、あづまへまかるにつつみてあひみぬ人をおもふ」と記している。歌集の表記に従えば、この歌は遠江の出発にあたって恋人への贈歌としても詠めるが、後拾遺集は相手を想起させるような別歌の解釈とはならないのである。それは、いとしい恋人への別れを願望する心の吐露したような独白歌の趣を持つ歌になる。この歌は会えぬまま別れをむかえざるをえない作者の悲嘆がこめられる。撰者通俊は出典とした家集詞書をあえてこのような自身の嘆きの歌ととらえるような詞書に改変させたとも考えられよう。

次の僧侶歌は堪円法師の詠(473)。

筑紫に下りて侍りけるに、上らむとて家主なる人のもとにつかはしける

山の端に月影見えば思いでよ秋風吹かば我も忘れじ

堪円法師は、生没年、伝記は未詳だが彰考館、陽明文庫本動物は「伊予国人、延暦寺、阿闍梨」とし、『左経記』に見られる「堪圓」と同一人との指摘もある。後拾遺集に本歌のみの入集である。

当歌は、東上する自分を東の山端の「月」、西の地からの家あるじの心を「秋風」にたとえた非常に素直な惜別の歌である。心に訴える叙情性を感じさせる。

この「別」歌に僧侶を中心とする、その前半の群頭に配されたのが慶範法師の詳細な詞書を持つ次の歌である。

筑紫へ下る人にむまのはなむけし侍とて、人
人酒たうべてひねもすに遊びて、夜やうやう
更けゆくまに、老いぬることなどを言ひ出
だしてよみ侍りける

誰よりも我ぞ悲しきめぐりこんほどもを松べき命ならねば

(479)

筑紫へ下向する人の別れの宴で酒を飲み、夜が更けるにつれて年齢のことに話が及んでいった時の詠歌事情が切々と述べられる。老年になってからの別れというものは再会を果たすことがないという予感とそのため切実な悲しみが取り巻くものである。その想いが、詳細な詞書に綴られた経緯とあいまって響いてくる。そのような作者の心情をより強く喚起させているのが詞書表記なのである。続く読み人知らずと良勢法師の贈答歌(480・481)も先の慶範法師歌と同趣のものであろう。

筑紫より上りて後、良勢法師の許につかはしける

別るべき仲と知る知るむつまじくならひにけるぞ今日はいくやしき
返し

なごりある命と思はばともづなの又もやくると待たまし物を

この二人の関係は不明だが、「むつまじくならひにける」仲の両者の別れの歌と読める。481の良勢法師歌は、縁語や掛詞をなげなく駆使した詠法が技法にとらわれることなく離別を超えた死別の余感を感じさせる実感を伴った別れの歌となっている。

後拾遺集の「別」巻を締めくくる終盤の三首(497・499)について

ふれておきたい。

寂昭法師、入唐せんとて筑紫にまかり下ると

て、七月七日船に乗り侍りけるにつかはしける

大納言公任

天の川のちの今日だにはるけきをいつとも知らぬ船出かなしな

入唐し侍りける道より、源心がもとに送り侍りける

寂昭法師

そのほどと契れる旅の別れだに逢ふことまれにありとこそ聞け

成尋法師もろこしにわたり侍りてのち、かの母のもとにつかはしける

読人しらず

いかばかり空をあふぎてなげくらんいく雲もともしらぬ別れを

これら三首は、異国への旅立ちの別れを主題にした歌で、時間的空間的秩序に従って配列された。この異国への別れは、不安と再会を成し得ない辛く悲しい運命として受けとめられたに違いない。その人間の別れの感情の極まりがこれらの歌となつて表現されている。

この僧侶歌人、寂昭も成尋も共に再び帰ることなく異国の地で没していった。別れに及んで送る者と送られる者の純粹な抒情が、歌をひき立てる簡潔な詞書に支えられて悲しみの世界を創り出しているといえよう。また、前半の僧侶歌人歌群に比べ、更に別離歌とし

て精神の深まりも見せる。

「別」の末尾を飾るのは、読人しらずとするが、影考館文庫本勅物にある「実、慶義上人母、中納言経通家女房」であり、この母なる女性は成尋法師母と親しい間柄の女性であつたのだろうか。成尋法師入宋後、高齢であつた成尋法師母の異国の子との別離の悲嘆を慰めるこの歌をもつて「別」巻はとじられている。この最終歌の撰者通俊の配列意識に関し、前歌寂昭法師詠との関連や成尋法師入宋の事件などが編纂意識に大きな影響を与えたことも指摘される。

「別」巻尾にこの異国にある子を思う老齡の母への慰撫の歌を置くことは、その直接的な母なる嘆きではなく、その間の事情を知る読み人知らずの女性がこの悲嘆を受けとめ、慰みの歌として再構成させているところに一つの抒情性を認めることができるのではないだろうか。この子との、また母との別れは人間の運命という普遍的なテーマを投げかけ、切々とした余韻を残し、「別」巻の抒情を集約させているようである。

「別」巻すべての詠歌に及んで考察することはできなかつたが、後拾遺集の「別」巻は、形態的には古今集を踏襲しているが、その叙情的世界は大きく変貌したといえる。別れという状況の諸相を人と人との関係性の中でとらえ直し、そこに一つの抒情世界を創り出そうとする新たな試みも感じられる。それは、一つには歌を理解する上で重要な働きを持つ詞書表記の問題が掲げられる。撰歌した歌の配列に際して当然撰者の歌の解釈や思考が大事な要素となつてくる。そうした中で、後拾遺集は人と人の別れの中で生じてくる関係性を軸にして撰歌し、別れというものを血族や姻戚という一つの

梓の中でくり広げられる感情や思考の諸相として別れの歌に描き出したといえよう。その結果、詞書表記には別れの対象となった人物やその状況、場などが三十九首のすべての別れの歌に記されることになったのであろう。この点古今集離別歌に「題知らず」歌が多数載ることと反している。

このような状況と相まって撰者通俊による詞書表記への介入という問題もあるいは考えられるかも知れない。別れの歌の主題を讀者に向けていかにその抒情性を訴えるか、新たな創造性への試みが詞書表記という部分に向けられたとも考えられよう。

また、この「別」巻の僧侶歌の抒情性評価という点も見逃せない事実であろう。この僧侶歌七首と、僧侶を中心とした別れの歌十首は二つの歌群に分けられて、その主張を異にした。掉尾を飾る別れの歌を、こうした僧侶たちの別れに及び、再会を果たせぬ苦しい想いやその悲哀の深さを詠うことで、この「別」巻の人間の永遠で持続的な問題と、そこに起こる人間たちの抒情世界を抽出して見せたのであろうか。別れは、様々な人間の情愛を異空間に葬ってしまう。しかし、その記憶は忘却されることなく人の心に刻みつけられるはずであらう。

(注一) 橋本健氏「後拾遺集」別」の構造」

(国語と国文学 昭50・1)

(注二) 川村晃生氏「後拾遺和歌集」注記

(和泉書院 平3)

(注三) 橋本不美男氏「王朝和歌史の研究」

(笠間書院 昭47)

文芸賞(第二回)について

文芸賞は、課外の創作・評論活動における優れた成果を検証するために、応募作品注、優れた作品を提出した現代文化学科の学生に贈られるものである。

平成一四年一月三十一日締切の今回、応募作品は、小説一編のみであった。現代文化学科教員全員による選考の結果、小説「白雪姫」(大胡綾香一年)に対し、「奨励賞」を、贈ることに決定した。作品は、独自性に欠ける部分が認められ受賞には至らなかったが、その努力は大いに評価でき、今後の健闘に期待し、「奨励賞」が贈られた。

残念ながら文芸賞の受賞は今回もなかったが、来年度に向けて更に充実した作品を期待したいと思います。

【奨励賞】

小説 「白雪姫」 一年 大胡綾香

なお、第二五回文芸賞作品募集は、平成一五年一月三十一日締切で行なわれた。